

日捲りカレンダー
いつも通り
慣れた朝夕
滅びを知らぬ民が

*

酔う酒は誰しも
酒の心地に任せ
親指、中指、後ノ指
焦燥も悶えの酒酔い

*

池に落とした小石
沈んだまま

沈んだ小石

何して遊んでいる

*

人の声耳に届き

頭落とし窓から

外見るは薄暗く

失明かと震撼覚え

*

幼きから勤勉家

本に赤鉛筆で線引く

自慢の息子

散髪も赤鉛筆はなさず

*

誰かを殴りたくなり

抑えきれず足で石をけり

痛さ忘れ

足で砂利ふむ醜さや

*

ざわめきが

胸が走る、シヨンシヨン

マツハのごとく

疼きやまず

*

日課

健康歩き

自由な身になり

ただ待つ身の決め事、日課

*

家族円満うれしくて

息苦しくないか

親孝行の青年になり

みつともないか

*

人見て顔そらす

素直な仕草身につき

治せずまま

人ほかす癖

*

学校からの帰り

田んぼに親が

二人の農作業目に入り

父より母が先に死ぬ

*

日没のクラブ活動帰り

雨になり

バック濡らさぬよう

学生服どぼどぼの

*

小屋の柱にもたれ

群がる草の小群

蟻が歩く

田んぼの杭になりしも

*

刈り入れ時期の

田んぼは農繁期

温い微風が

なんとう死にたくなり

*

村の鎮守の祭り

青年どもの喚き

むなしき喚き

興じる村民の無邪気さ

*

赤子が木の影で

老人が田園道

走りながらバス停

人間放牧、野菜と米

*

ポロシャツの襟立てて

そんなにカッコつけ

どこへ行く

黄昏しに行く

*

琵琶湖大橋車に徒歩

雄大な橋なり

山林の川に丸太一本の橋

渡るに生命感じ

*

小学校一人で帰る憂鬱さは

自由な思い湧き

ぎりぎりに歩く川沿い

一生持つ心なり

*

力のない指で

ペン持てば

やっぱし

指から落ちるペン

*

これは真実である

痴呆は頭に良いが身体に悪い

貰った優越

滅びのプレゼント

*

比叡山が煮えた

ヒマラヤが来た

和、環

円卓や世界が宗教、延暦寺

*

出勤車庫まで歩く

死んでおくべきだったか

あの時に

リハビリ散歩、精神分裂

*

母が「痛い」と

母の足強くつけた

悩んだ、己

親を足蹴に「苦惱」とは

*

皆に笑われ

皆に誇られ

誰が告げた

己の心の奥の欲深さ

*

清澄庭園通り

ぎしぎしと木の階段
弾むぎしぎし

深川図書館

*

部屋の灯学問の

偏差値に縛られ

灯では能力解らずが

金儲けの才侮れず

*

虚無感が蝕む

鈍らな肉体

人生棒に振っても

浜は長浜

*

そんな馬鹿な

大人気ない

やめとけよ

歓楽街で薄暮のハーフ

*

ハシカイ子供がいた

隣の男にへばりつく

ハイエナの如く

ハシカイハイエナ餌に食らいつき

*

後ろに男が

ピストルもって殺すつもり

おびえが出ない

審判員に聞く

*

「聖食」があつて「聖眠」は

いいではないか

「聖食」とは

震えて食べる恍惚

*

下宿の大屋さん

金持ち大屋さん

家賃の集金頼まれ

己の分も己が集金

*

改革なんか上の空

自治会のまとまり

今年も毎年

恒例の毎年子守唄

*

貧乏丸裸

財産なんか

健康であれば

仏のスタンスで

*

座頭の思い

「職」と母が言う

ひつこい「職」

何年経つても「職」

*

あの餓鬼、あの餓鬼

流行になった

隣のおっさん何時までいう

死ぬまでいう餓鬼つぼさ

*

弱虫小虫田舎虫

ハエが飛び交う

血吸うハエ

夏のハ工取り出井

*

三重の、津の
海岸砂浜で

蟹の真似して横歩き
前進度胸なく

*

伊勢神宮修学旅行
小学校の思い出
二見ヶ浦の日の出
一泊二日の旅なり

*

怒鳴られました
ゲートボウル場
ピアノ音が煩いと
ピアノの音で言う